

## 『水経注疏』 訳注凡例

- 一・底本は一九五七年北京科学出版社による熊会貞稿本影印本とする。その上で一九八九年江蘇古籍出版社排印本などとの相違をできる限り指摘する。本書末尾に影印本を縮小し標点を加えて載せた。
- 二・経文と注文、疏文は以下のように区別する。
  - ・経は一四ポイントの明朝体とする。疏文・注釈中での引用は『経』とする。
  - ・注は一二ポイントの明朝体とする。疏文・注釈中での引用は『注』とする。
  - ・疏は九ポイントの明朝体とし、注文より二字分下げる。
- 三・底本は注を段落に分け、段落ごとに改行しているが、訳注では疏を伴う注文ごとに改行した。二字分上であり、活字も大きい注文を横にたどれば、注文としてのまとまりがあるだけでなく、疏の訳文が比較的読みやすくなることを考えての措置である。
- 四・疏文の位置は原則として底本の体裁に従うが、文章の体を損なうようなケースの場合は、注の文を続けて、その後にもとめて疏文を配し、丸数字で疏文のもとの位置を示す。
- 五・底本では各種の見解が追いつ込み形式で掲載されているが、読者の便を考えると、疏文は分かち書きを多く用いた。文字の異同等簡単な疏以外の「某曰く」「某按」などとなっているケースは、それぞれに行を独立させ、「姓…」

で示す。例えば「(楊) 守敬按ずるに、云々」という疏文は「楊・云々」という形で示す。

六・底本にはないが、『楊守敬集』(謝承仁主編『楊守敬集』第三・四冊『水経注疏』湖北人民出版社、一九八八、楊守敬集と記す) や台湾本(楊守敬・熊会貞『楊熊合撰水経注疏』台湾中華書局、一九七一、台湾本と記す) に基づいた江蘇古籍出版社排印本(楊守敬・熊会貞、段熙仲点校、陳橋駅復校『水経注疏』江蘇古籍出版社、一九八九、江蘇本と記す) にある疏文が比較的多い。この場合は《》を付して、底本にはない文であることを示す。その上で訳を付した。なお、各本には異同がかなりある。できるだけそれは取り上げるが、あまりにも細かいものは省く。底本の「全・趙・戴は改める」が江蘇本・台湾本では「趙・戴は改める」となっていることが非常に多い。一々注記することは避け、「全」のように傍線を付して江蘇本などで省略されていることを示す。

七・底本の文に乱れがあり、そのままでは訳せない場合は、【】に原文をそのまま入れ、その後括弧を付して訳を示し、注釈をつける。

八・底本の疏文中に二行分かち書きになっている箇所がある。その箇所は「」で示した。ただし二行分かち書きでも、巻数を示す場合は「」には入れない。

九・注釈は底本の段落ごとにまとめて、当該段落の末尾に置く。ただし、訳注の都合で、段落の途中に注釈を置くこともある。

一〇・漢文独特の簡潔な表現により日本語としての意味を取りにくい箇所はできる限り主語などを補った。括弧を付

して補った箇所を示す場合と、煩雑になるので補った箇所を明示していない箇所があるが、末尾の底本を参照されたい。

一・年号に西暦を付すなど、訳文中に必要と思われる箇所には括弧によって簡単な説明を付加した。書籍の巻数は訳注で示さない場合に付したが、この場合、括弧は用いない。

二・『後漢書』の巻数は、中華書局排印本に従って表記した。

三・使用する文字は正字を用いるべきであるとの見解もあるが、訳注の意味を重んじて通行字を用いることとした。

四・訳注では以下の人名は姓のみ記す。これは『疏』に倣ったものである。

明・朱謀埜・朱

清・趙一清・趙

清・全祖望・全

清・戴震・戴

清・楊守敬・楊

清・熊会貞・熊

なお、全祖望には五校本と七校本が知られるが、楊守敬・熊会貞が参照したのは後者である。本書では七校本に

あるが五校本にない場合には「五校本にはない」というように、必要に応じて相違を記す。

一五・底本や訳注において頻繁に引用される書籍については略称を用いる。底本できちんと表記してあっても本訳注においてはすべて略称で統一する。

朱謀埜 『水経注箋』…『箋』

王先謙 『合校水経注』…王 『校本』

趙一清 『水経注箋刊誤』…『刊誤』

『水経注疏』（一九八九、江蘇古籍出版社）各卷末における段熙仲（陳橋駅補訂）『校記』…段 『校記』

陳橋駅校 『水経注校證』（中華書局、二〇〇七）…陳 『校證』

楊甦宏・楊世燦・楊末冬補 『水経注疏補』（上下、中華書局、二〇一四）…『注疏補』

『漢書』地理志…『漢志』

『統漢書』郡国志…『統漢志』

『三国志』…『魏志』・『蜀志』・『呉志』

『晋書』地理志…『晋志』

『魏書』地形志…『地形志』

『隋書』地理志…『隋志』

『新唐書』地理志…『新唐志』  
『金史』地理志…『金志』  
『明史』地理志…『明志』  
『資治通鑑』…『通鑑』  
『元和郡縣圖志』…『元和志』  
『元豐九域志』…『九域志』  
『大明一統志』…『明一統志』  
『大清一統志』…『清一統志』  
『讀史方輿紀要』…『紀要』  
『太平寰宇記』…『寰宇記』  
『太平御覽』…『御覽』  
『芸文類聚』…『類聚』  
『北堂書鈔』…『書鈔』  
『永樂大典』…『大典』  
『說文解字』…『說文』

凡 例

『春秋左氏伝』…『左伝』

『世説新語』…『世説』

『洛陽伽藍記』…『伽藍記』

一六：右記のほか、正史とその注釈書、地方志等には特に説明を加えない。『括地志』『十六国春秋』等もこれに準ずる。

一七：疏において次の略称で言及される『水経注』諸本の校訂者を以下に記しておく。

黄本…明・黄省曾

呉本…明・呉琯

譚本…鍾本…明・譚元春・鍾惺

孫潜校本…清・孫潜

項綱本…清・項綱

全本…清・全祖望

一八：訳注において用いる下記の書籍は、書名のみを記す。

『水経注引書考』…鄭徳坤著、台北芸文印書館、一九七四

『水経注碑録』…施蟄存著、天津古籍出版社、一九八七

一九． 訳注において用いる下記の書籍は、略称を使用する。

杜金鵬・銭国祥主編『漢魏洛陽城遺址研究』科学出版社、二〇〇七…『遺址研究』

洛陽市文物局・洛陽白馬寺漢魏故城文物保管所編『漢魏洛陽故城研究』科学出版社、二〇〇〇…『故城研究』

中国社会科学院考古研究所編著『漢魏洛陽故城南郊礼制建築遺址 一九六二～一九九二年考古発掘報告』文物出版社、二〇一〇…『礼制建築遺址』

なお上記『遺址研究』以下の三書に含まれる論文を引用する場合は、初出を示さず、これら書籍の所収と記すことがある。

李曉傑主編『水経注校箋図积・渭水流域諸篇』上下（復旦大学出版社、二〇一七）…『校箋図积』

中国古代地域史研究班編『水経注疏訳注 渭水篇』上（東洋文庫、二〇〇八）…『訳注 渭水篇上』

中国古代地域史研究班編『水経注疏訳注 渭水篇』下（東洋文庫、二〇一〇）…『訳注 渭水篇下』

中国古代地域史研究班グループ編『水経注疏訳注 洛水・伊水篇』（東洋文庫、二〇一五）…『訳注 洛水・伊水篇』

塩沢裕仁著『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』雄山閣、二〇一〇…『千年帝都』

塩沢裕仁著『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、二〇一三…『都城境域研究』

二〇． 本書訳注者名とその分担部分は以下の通りである。

凡 例

六三

長谷川順二	六五～八七頁、三六一～三六九頁
兼平充明	八七～一二〇頁、三六九～四一五頁
山元貴尚	一二〇～一五〇頁、四一六～四五〇頁
石黒ひさ子	一五〇～一七〇頁、五八五～六〇六頁
角山典幸	一七〇～二〇九頁、四七九～五一〇頁、六二九～六四三頁
板橋暁子	二〇九～二四六頁、五一〇～五四五頁
大知聖子	二四六～二七三頁
宇都宮美生	二七三～三〇一頁、四五〇～四七九頁
田熊敬之	三〇一～三二九頁
堀井裕之	三二九～三六〇頁、六〇六～六二八頁
宮内勇弥	五四六～五五九頁
柏倉優一	五六〇～五八四頁